たとえば、平山姐御は
「お兄ちゃんに買ってもらった」
高価なネックレスや、指輪などの装身具、コートなどの衣類を自慢にしていました。
それは衣裳自慢でもあり、兄貴自慢でもありました。
そういう物の品定めは、私には大苦手なのですが、あるとき質屋へ使いを頼まれて、成程と合点しました。
「親父にも、兄ちゃんにも内密やで」
と言われて、ことづかった指輪二点を、私の名で入質したのですが、質屋の主人は私の予想をはるかに超えて値ぶみしたのです。
それほどのものを買い与えていた親方は、妹思いの上に、気前のよい男だったと言えるでしょう。
妹に対してだけ気前が良かったのでしょうか。そうではなかったと思います。
私が平山組に入った翌年か、翌々年か、新和歌浦へ旅行したのを覚えています。
松本組傘下の全員の費用はすべて親方持ちで、たしか伊勢から新和歌浦へ廻るコースでしたから、一泊二日か、二泊三日で、旅行から帰った翌日も仕事は休みでした。
その次の年は仕事の都合で旅行が取り止めになった代りに、面白の大きな中華料理屋で宴会がありました。

正式のフルコースで、貧乏育ちの私などがそれ以前にも以後にも、お目にかかったことのないような美味珍味が、回転式の円卓に次々と計も豪富に現われました。もちろん酒やビールもふんだんに出ました。
「何だ、その程度のこと――」
と言われるかも知れません。人によって受け取り方は違うでしょう。
だが、旅行や宴会のことは気前の良さの証明にはならないにしても、ケチではなかったことの証明と言えないでしょうか。
それが人が変ったようになったのは、経済的な事情が変ったからでしょう。
以前は、前借りを申し込むと、たいてい右から左でした。だから、松本飯場には給料がいつも赤字で、給料日に前借りをする者が多かったのです。
今では三度に二度は取りつく島もなくい不機嫌な顔で断わられるのです。
たまに前借りに成功しても、親方の表情に変りはありません。もっとも、苦虫をかみつぶしたような顔は昔からで、めったに笑顔を見せぬ人でした。
それよりも、そんな時の松本姐御の態度が、ちょっと尋常ではありません。

前借りを頼む若い衆と親方の問答を傍でニコニコ見ているのです。親方が断るとニコニコ顔に変りはありません。
が、若い衆が前借りに成功すると、姐御の表情が、とたんにスッと変るのです。同時にプイと立ち上って姿を消します。物も言いません。
苦虫変じて夜叉となる。とでも申しましょうか。その荒々しさに金を借りた若い衆の方が息を呑んでしまいます。
「松本親方もケチだが、姐御はもっとケチ」
などと言われるのも道理でしょう。
これが平山夫婦になると大分違います。
平山は飯場を持っていても、親方の義弟ではあっても、松本組の配下です。親方ほど金がある筈がありません。
前借りを申し込んでも、たいてい断られます。平山姐御は、男顔負けの荒っぽさで若い衆を口汚くののしりさえします。
それでいてこの夫婦は陽気なのです。
たとえば雨の日――
土方殺すにゃ何とやら言いますが、仕事が休みになって、若い衆たちがゴロゴロしています。
金がないから行く所もなく、TVも面白くなし、新聞も古雑誌も読みあきたし、そんなとき、平山親父の大きな声が明らかに聞こえてくるのです。
「オーイ、前借貸ししてほし者、居るか」
つづいて階段を踏らかな足音がして、大男が姿を現わします。
「前田、お前どないや」
「松川、映画見に行ってこいや」
「岩屋、麻とらんと起きんかい」
一人一人に声をかけます。
松本親方のところへ朝から出かけて、若い衆に貸す金を都合してきたのです。
体を寄せて余していた連中が、われもわれもと手を出したのは言うまでもありません。
ですが、平山が貸してくれる金は、ナント二百円か三百円（一九六〇年頃）です。
「ジャリがアメ玉買うんじゃあるまいし」
「映画見たらツリ銭もあらへん」
みんなブツブツ言ってましたが、それでもその金を持って出て行きました。
銭湯、そんな具合でしたから
「平山親父のケチ」
と陰口をたたく者がいても、人柄のせいでしょうか、

悩む者はいません。

前借りの多い松本飯場を嫌やむことはありますが、それは子部屋の宿命とあきらめている面もあって、平山個人への不満にはなりません。

朝の五時半から怒声をはり上げ

「御飯いただく、パンモグライ」

と親父が怒鳴っても、眠い目をこすって、

「朝から近所迷惑やないか。親父の声は一里先まで聞こえるぞ」

寝床の中でぼやきますが、その大声さえが愛敬になってしまうのです。

「松本親方のケチ」

と言うとき、恨みがましいますが、

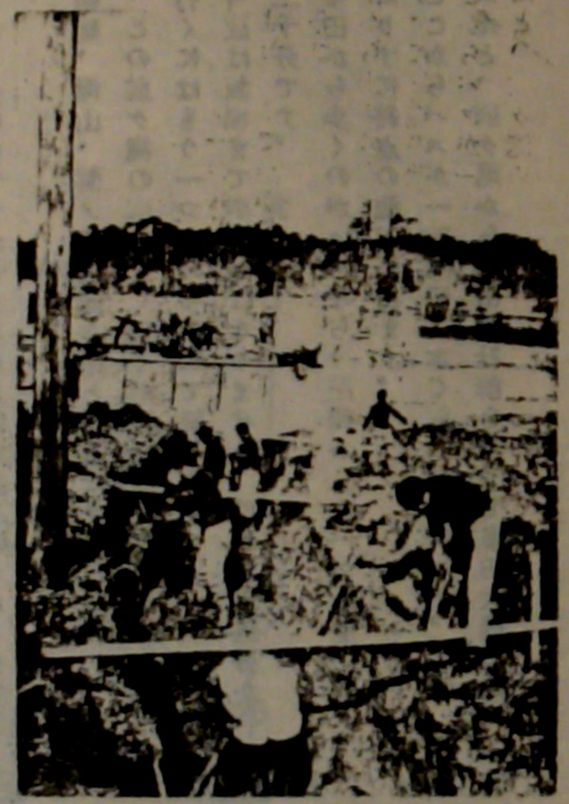
「平山親父のケチ」

には、つい苦笑してしまうのです。

(三)

近江八幡の一件は、元請けが工賃を支払わなかったから起ったのです。

松本親方だって、予定通りに金が入っていたら、若い衆から「ケチ」と言われずにすんだ筈です。



松本に金がなければ、平山はそれ以上に苦しいのですが、それでも若い衆から前借りを申し込まれれば、十人が十人ことわるわけには参りません。

前借りをことわれば、翌日の仕事を休んだり、悪くすればトンズラされます。仕方なしに姐御がその金を工面します。

「たまったものではない」

というので、若い衆に前借りさせるだけでも何とかしてくれ、と平山が松本親方に交渉したら

「ミツに言え、ミツが何とかするわい」

という返事だったそうです。

ミツというのは平山姐御の名前です。

その返事を聞かされて、姐御は顔に出てしまい、ほとんどヒステリー状態です。

そして、そのあげくには姐御の指輪を売が質屋に持って行くということになるのです。

そんなことが繰り返されて、松本と平山の間はうまく行きません。

多田へ行っても、この関係は好転するどころか悪くなる一方でした。

近くに居てさえこんなでしたから、遠くなればおたがいの気持ちが通じにくくなるのも当然でしょう。

その距離もさることながら、多田は不便な土地でした。

まず松本飯場から多田までの道順から説明しましょう。

ボートで有名な尼崎センタープール前駅まで徒歩で五分たらずですが、ここから阪神尼崎まで電車で出なければなりません。

そこからバスに乗って、産業道路を北へ進みます。バスは南北に長い尼崎を抜けて、伊丹市も通り抜け川西市に入ります。このバスに乗っている時間は三〇分位でしょう。

川西能勢口というところでバスを降り、阪急電車の支線である能勢電鉄というのに乗ります。単線の郊外電車で本数も少いのですが、チンチン電車並みのスピードです。

絹延、滝山、鷲ノ森、鼓ケ滝と優雅な名の駅があります。この鼓ケ滝の駅のすぐ近くが現場なのですが、飯場へ行くにはもう一つ先の多田駅で降ります。

今度は飯場まで歩かねばなりません。これが十五分から二十分です。

多田から歩くのがいやなら、尼崎からのバスを能勢口で降りずに終点の池田に出ます。

ここからバスが一時間に二本ぐらい出るのです。このバスだと、鼓ケ滝から多田神社前を通って多田大橋で降りると、飯場は目の前なのです。

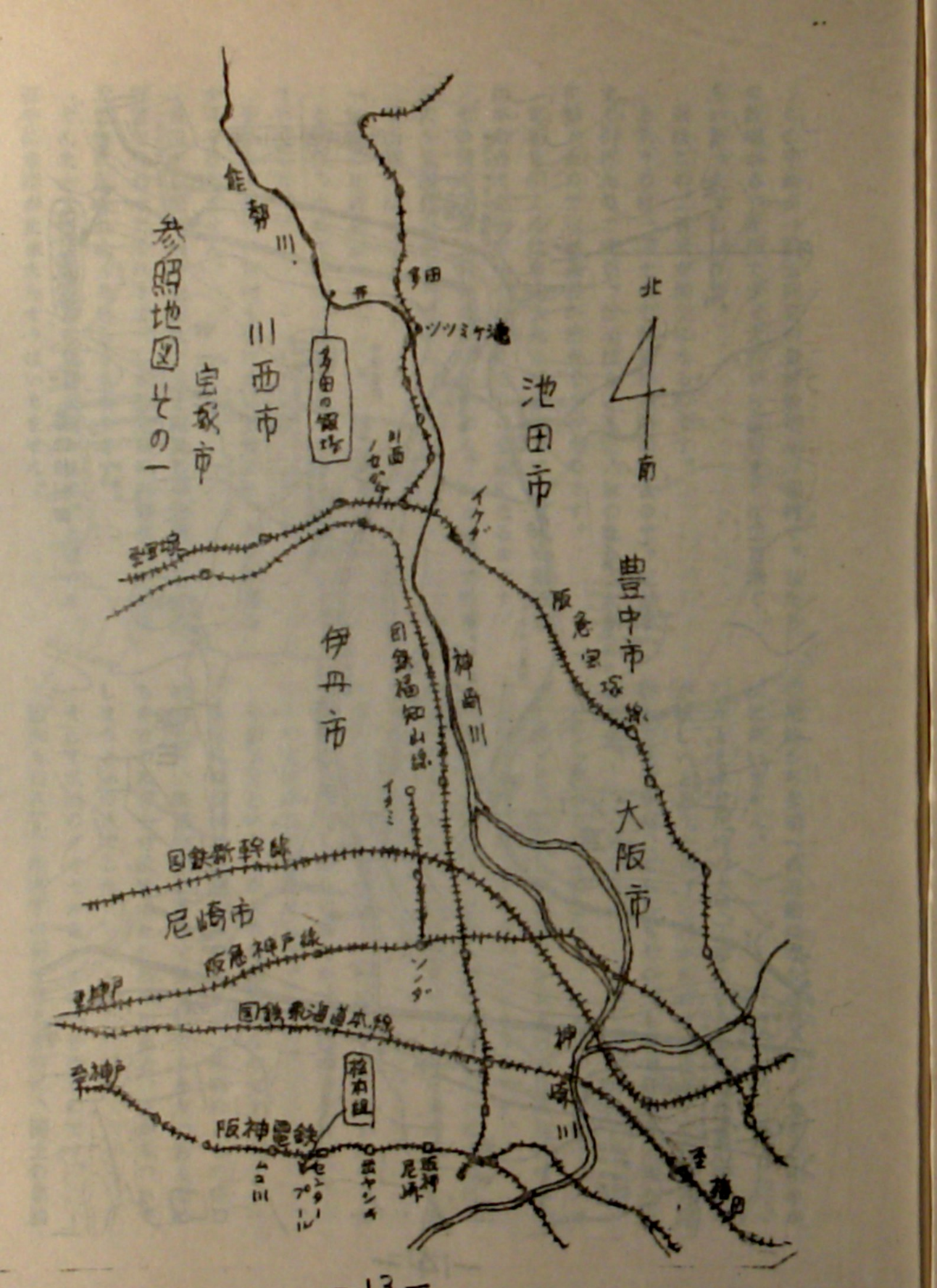
このバスは、川西能勢口からも乗れますが、池田が始発なので、料金も時間も変りませんから、こういう乗り方が便利なのです。

こうして、バスと電車を乗り替えて、待ち時間をふくめて、一時間四十分なら早い方だったと思います。

くどくどとこんなことを書いて読みにくかったと思いますが、こういう地理的なことを頭に入れて置いてもらったほうが、これから書こうとしていることが、読者に手っとり早く理解してもらえると思うからです。

また、現在では多田のあたりは大きな団地が次々に出来て、交通の便利もそのころとはくらべものにならなくなっているので、そのあたりの違いも理解して欲しいわけです。

さて、バスを多田大橋で降り、橋を渡るとすぐ右側の川岸に国土開発の事務所がありました。これは能勢電の多田駅前から多田神社を経て大橋までの道ぞいでもあるわけです。

その道の国土の事務所と反対側に、乗用車一台やっと通れる位の枝道があります。

この枝道を入ってしばらく行くと、突然視界が開けて、整地すれば野球がらくに出来そうな平地があります。